

# 大相撲名古屋場所

令和六年



名古屋での七月場所が始まったのは昭和33年。当初の会場の金山体育館は冷房設備がなく蒸し風呂のような暑さで、「南洋場所」と呼ばれた。そんな金山体育館に代わり昭和40年から会場となった名古屋市中区の愛知県体育館は、名古屋城の旧二の丸御殿跡に位置し、名古屋城の天守を望む眺望は抜群。当時としては最新鋭の設備を誇り、冷房が完備され、格段に過ごしやすくなって力士にもファンにも大好評の環境で、数々の名場面が刻まれてきた。

昭和40年の初の開催では、横綱大鵬が17回目の優勝。昭和44年は新大関清國が初優勝し、場所入りの際の車のナンバープレートが「7581(名古屋)」だと話題になった。昭和46年は、愛知県蒲郡市出身の横綱玉の海が北の富士との約4分の大相撲を制して初の全勝優勝。同年10月に急逝したためこれが最後の優勝となった。昭和47年は平幕高見山が外国出身力士初の優勝。時のニクソン米大統領から祝電が届く歴史的な出来事となった。昭和49年は横綱輪島が本割、決定戦と大関北の湖に左下手投げで連勝し逆転優勝。場所後に史上最年少で横綱に昇進した北の湖は、この悔しさをバネに大横綱へ成長した。昭和56年は大関千代の富士が北の湖との千秋楽相星決戦を制し横綱昇進。平成元年には、同じ九重部屋の北勝海と、史上初の同部屋横綱同士での優勝決定戦を制している。

平成5年は横綱曙が、大関貴ノ花(のち横綱貴乃花)と関脇若ノ花(のち横綱若乃花)との三つ巴の決定戦で連勝して優勝。この時、史上最年少横綱昇進を阻まれた屈辱を糧として横綱に昇進した貴乃花は、平成7年から10年まで名古屋4連覇を果たしている(千代の富士、朝青龍と並び最多)。11年には関脇出島が決定戦で横綱曙を破って初優勝して大関昇進。千秋楽、本割で、同じ武蔵川部屋の大関武蔵丸が、単独首位だった横綱曙を破る援護射撃の末の劇的な逆転優勝だった。

## 愛知県体育館での七月場所の歩み

◆大相撲よもやま話◆◆

愛知県体育館での優勝回数(昭和40年～令和5年)

回数	力士名
8回	白鵬
6回	千代の富士
4回	輪島、貴乃花(横綱)、朝青龍
3回	日馬富士
2回	大鵬、琴櫻(横綱)、北の湖、曙、魁皇
1回	柏戸、清國、北の富士、玉の海、高見山、金剛、隆の里、若嶋津、北天佑、旭富士、琴富士、水戸泉、武蔵丸、出島、千代大海、御嶽海、鶴竜、逸ノ城、豊昇龍

(令和2年七月場所はコロナ禍で東京での開催)



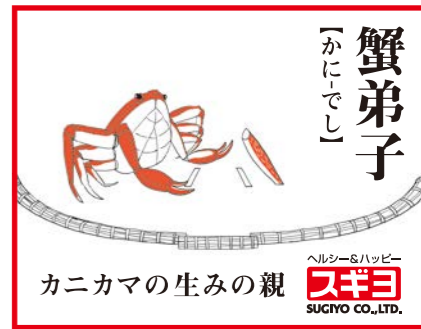
昭和40年、初めて七月場所が開催された際の愛知県体育館の外観と土俵祭の様子



令和5年七月場所で優勝した関脇豊昇龍の優勝パレード。旗手は明生

愛知県体育館で最多となる8回の優勝を飾っているのが白鵬。令和3年には大関照ノ富士との全勝対決を制し、最後となる45回目の優勝を飾っている。平成16年から令和5年までの19回の開催のうち18回で、その白鵬をはじめ、朝青龍、日馬富士、鶴竜、逸ノ城、豊昇龍とモンゴル勢が優勝を果たしている中、「ドルフィンズアリーナ」という愛称がつけられた平成30年には、愛知県の隣の長野県出身の関脇御嶽海が初優勝を成し遂げている。

そんな愛知県体育館も老朽化などのため、令和7年から名古屋市中区の名城公園内に移転して「IGアリーナ」という愛称になる。現在の会場では最後、59回目の開催となる令和6年は、どんな名場面が生まれるだろうか。





◆名古屋場所の優勝力士◆◆

伏兵・富士錦が逃げ切り平幕優勝

昭和39年七月場所優勝

富士錦(西前頭九枚目 14勝1敗)

昭和40年から七月場所の会場が愛知県体育館に移ることが決定。昭和33年から7月に名古屋で本場所が始まって以来、会場として親しまれていた金山体育館で最後の開催となった昭和39年七月場所は、序盤から波乱の展開となった。

3横綱のうち、西横綱柏戸は、直前の五月場所11日目に豊山を寄り倒した際に負った右肩鎖骨骨折が癒えず、初日から休場。五月場所10勝5敗の不振からの挽回を目指した東張出横綱大鵬は、二日目から開隆山、明武谷、海乃山に3日連続で金星を献上し、本態性高血圧と診断され五日目から休場。五月場所の覇者・東横綱栃ノ海も七日目まで3勝4敗と不振。七日目を終えて、全勝は西張出大関豊山と西前頭九枚目富士錦の2人だけとなった。

豊山は、東京農業大学で学生横綱に輝き、スピード出世で大関に昇進して旋風を巻き起こした実力者。大関9場所目で念願の初優勝に向けて突き進む。一方の富士錦は、温厚で笑顔絶やさず「平和ちゃん」と呼ばれた人気力士。突き押しを武器に小結で8場所を経験し、3場所連続負け越しで番付を落としたこの場所は下位力士相手に白星を重ねていたが、終盤、上位と対戦が続けば勝ち続けるのは難しいと思われていた。

そんな予想どおり、十一日目に富士錦が西前頭二枚目開隆山、肩透かしにつけ入られて押し倒され初黒星。豊山は、東前頭二枚目清國と対戦し、モロ差しを許して寄り詰められながら清國の勇み足で白星を拾って単独首位に立った。これで豊山が有利と思われたが、十二日目、富士錦が東前頭筆頭廣川を押し出した後、豊山は2敗と好調な東張出大関栃光に二方的に寄り倒されて初黒星。豊山と富士錦がともに1敗で、再び首位に並んだ。

十三日目は、富士錦が西前頭筆頭明武谷を押し出し、豊山は西関脇北の富士を吊り出してともに譲らず。十四日目、富士錦はこの場所初めて三役力士と対戦し、東関脇羽黒川を押し倒して1敗を守った。豊山は栃ノ海得意の右上手出し投げに土俵を飛び出して痛恨の2敗目。大詰めにきて富士錦が初めて単独首位に立った。

千秋楽、富士錦の相手は北の富士。この場所が新関脇の期待の新鋭だが、2場所前の初顔合わせでは富士錦が寄り倒して勝っている。勝てば優勝決定という大一番、富士錦は立ち合いから持ち前の突き押しでペースを握り、負けじと突き返す北の富士の足が止まって上体が起きたところ、すかさず右からイナシ、叩き込んで這わせて快勝。14勝1敗で初優勝を決めた。豊山は西大関佐田の山を寄り切って13勝2敗としたが、優勝はならず。現在の取組編成では、

同様の場合は終盤、どこかで上位同士の対戦の代わりに、優勝を争う豊山と富士錦の直接対決が組まれた可能性が高いが、当時はそうした例はなかった。この時点で両者の対戦成績は豊山が7勝4敗とリードし、直前でも2連勝していた。もしも直接実現していたら賜盃の行方はどうなっていたかわからないが、千載一遇の機会をつかんだ富士錦の勝負強さが光った。

初優勝とともに4回目の敢闘賞と初の技能賞にも輝いた富士錦は、1年前の七月場所中に、母を亡くしている。天国の母にも背中を押されたかのような、ドラマチックな優勝だった。



初優勝を果たした富士錦。師匠の高砂親方(元横綱前田山)や母の遺影とともに喜びに浸る

この場所の十五日間の幕内全取組が動画で楽しめる

日本相撲協会公式YouTubeチャンネルの「大相撲アーカイブ場所」で、昭和39年七月場所の幕内全取組の動画を公開中。メンバーシップ登録(月額990円)すると視聴できます。下のQRコードからアクセスしてください。



履物

◆大相撲「モノ」語り◆◆

「おしゃれは足元から」といわれる。力士の場合、その象徴が「雪駄」だ。

雪駄とは、一般に、竹皮を編んだ草履の一種で、裏面に皮を貼って防水機能を備え、踵の部分には金属製の鋳が打ち込まれたものを指す。力士が履く雪駄はエナメル製で、独特の光沢を放つて染め抜きや浴衣によく合い、踵の部分を地面に擦らせ、「シャツシャツ」と音をたてながら歩く姿は惚れ惚れするほど粋だ。

ただし、雪駄が許されるのは三段目以上で、序二段以下の力士は木製の「下駄」を履く。雪駄に比べると野暮なのは否めない。だから、関取になる前の目標として「三段目に上がって雪駄を履きたい」と掲

げる力士も多い。晴れて三段目に昇進すると、師匠や部屋の間取などから雪駄を贈られるのがならわしだ。関取は公式行事では、紋付き羽織・袴に、エナメル製ではなく畳張りの雪駄を履く。足袋にも決まりがあり、関取は、正装の際は白足袋、場所入りなどの準正装の際は黒足袋を履き、幕下以下の力士は番附に依りて裸足に雪駄や下駄を履く。また雨や雪の際には、雪駄ではなく、指先が濡れないために皮製カバーを付けた下駄を履くこともある。



湘南乃海が使っている雪駄。エナメル製で独特の光沢がある。サイズは最大の5L

